

# 朝鮮総督府の土木官僚本間徳雄の活動

——朝鮮・満洲国・中国・日本

広\* 瀬 貞 三

はじめに

植民地期朝鮮において、朝鮮総督府（以下、総督府とする）は道路建設、河川改修、港湾建設、市街地整理、上水道、下水道、災害復旧など、大規模な土木事業を行った。このため、総督府に内務局土木課（一時は土木部）を置き、全国に土木出張所を設置した。これらの過程で、総督府には土木技術者を中心に土木官僚ともよべる階層が形成された。総督府の土木事業の実態を明らかにするには、言うまでもなく各々の業種別の工事の分析が必要である。その一方で、こうした工事を担当した土木官僚の実態解明も必要であろう。私は先に総督府の職員録をもとに、土木官

僚（長官・部長・局長、土木課長、事務官・土木事務官、出張所所長、技師、技手）の実態と特徴を明らかにした。<sup>1</sup>しかし、この中では特定の個人を取上げて、その行動と思想について検討することはできなかった。

総督府の土木官僚を研究する場合、まず一七名の土木関連の長官・部長・局長の分析が必要である。しかし、現在のところいづれも十分な史料がない。次いで専門職として最高位にあった一二名の土木関連課長が重要である。しかし、これらもまだ十分な史料が発掘されていない。次のレベルとしては、三八名の土木出張所所長がいる。植民地期に出張所は合計二一ヶ所が置かれたが、この中で特に重要な地位にあったのが、京城出張所と釜山出張所である。京城出張所の所長は計七名、釜山出張所の所長は計四名である。京城出張所は朝鮮の中心であるため重視され、また釜山出張所もこれと並んで重要である。この役職を経て、二名（榛葉孝平、横井増治）が土木課長に就任した。<sup>2</sup>

本間徳雄（一八八九―一九七四）は京城出張所所長を一九二五年から一九三二年まで七年間に亘って務め、三八名の土木出張所所長の中でもきわめて重要な地位にあった。しかも、幸いなことに、死後に妻が回想録を編纂し、表1のように比較的多くの本間の著述が残っている。このため、本稿ではこれらの関連史料を中心に、土木官僚の一事例研究として、本間徳雄（以下、本間とする）を取上げる。

本間は一九一五年から一九三三年まで一八年間、朝鮮で土木事業に従事し、その後「満洲国」（以下、括弧は省略する）に移り、敗戦時までの一二年間は最高級の土木技術者の一人だった。また、敗戦後は一時中国に抑留されて日本本土技術を伝え、日本に引揚げた後も日本でコンサルタント会社を設立して建設事業に携わった。いわば、戦

表１・本間徳雄の著作

番号	表 題	刊行物名	巻号・発行所	年 月
1	大同橋に就て	朝鮮	102 号	1923 年 10 月
2	今日こそ京城都市計画の好機である	朝鮮と建築	5 輯 7 号	1926 年 7 月
3	工事監督について	朝鮮土木建築協定会報	104 号	1927 年 1 月
4	漢江改修計画に就て	朝鮮土木建築協定会報	111 号	1927 年 8 月
5	京城の都市計画に就いて	朝鮮と建築	8 輯 4 号	1929 年 4 月
6	富国の源、科学智識	朝鮮土木建築協定会報	160 号	1931 年 7 月
7	錦江橋の設計概況	朝鮮土木建築協定会報	162 号	1932 年 2 月
8	朝鮮総督府京城土木出張所の事業(一)	土木建築工事画報	8 巻 3 号	1932 年 3 月
9	朝鮮総督府京城土木出張所の事業(二)	土木建築工事画報	8 巻 4 号	1932 年 4 月
10	満洲の河川調べ	朝鮮及満洲	342 号	1936 年 5 月
11	第二松花江発電計画に就て	工事の友	9 巻 3 号	1937 年 11 月
12	松花江水力発電計画に就て	満洲の技術	15 巻不明	1938 年不明
13	巻頭の辞	建設	4 巻 3 号	1939 年 4 月
14	満洲水力電気事業に就て	土木学会誌	25 巻 4 号	1939 年 4 月
15	満洲水力電気事業に就て	満洲の技術	17 巻不明 (132 号)	1940 年不明
16	満洲水力電気事業に就て	国立中央博物館時報	5 号	1940 年 5 月
17	素人将棋の話	カナオ会報	6 号	1942 年 1 月
18	素人将棋の話	土木満洲	2 巻 2・3・4 号	1942 年 4 月
19	就任の辞	土木満洲	3 巻 4 号	1943 年 8 月
20	年頭所感	土木満洲	4 巻 1・2 号	1944 年 2 月
21	発電水力の歴史を語る座談会	発電水力	15 号	1955 年 3 月
22	発電水力の歴史を語る座談会 (続)	発電水力	16 号	1955 年 5 月
23	豊満ダム	あゝ満洲	同刊行委員会	1964 年
24	満洲工業の姿	あゝ満洲	同刊行委員会	1964 年
25	巨大な電源開発	あゝ満洲	同刊行委員会	1964 年
26	溥儀執政のことなど	原口忠次郎の横顔	同刊行委員会	1966 年
27	朝鮮の土木事業について	朝鮮の国土開発	友邦協会	1967 年
28	朝鮮の洪水回顧	朝鮮の国土開発	友邦協会	1967 年
29	身辺雑記	カナオ会報	9 号	1968 年 5 月
30	本間家の栄枯盛衰七百年	カナオ会報	9 号	1968 年 5 月
31	関東軍特務部時代の秋山中佐を偲ぶ	秋山徳三郎君の思い出	新光道路	1968 年
32	電源開発	満洲国史・各論	満蒙同胞援護会	1971 年
33	満洲における満洲国工事・座談会記録 (3)	日本土木建設業史	技報堂	1971 年
34	概説	豊満ダム	大豊建設	1979 年
35	豊満ダム	豊満ダム	大豊建設	1979 年

「カナオ会報」は、本間美保子編『本間徳雄を偲んで』（同人、1977 年）所収。筆者作成。

前・戦後を通じて、朝鮮、満洲国、中国、日本の四地域で土木事業に従事した、稀有な土木技術者である。先行研究として、本間を対象にした研究論文は皆無である。本稿では彼の生涯を辿りながら、四つの地域における彼の土木活動の具体的な内容を明らかにする。これを通じて総督府の土木官僚の具体的な活動の実態を解明し、今後進められるであろう土木官僚研究の基礎的な作業を行なう。

## 一・朝鮮における活動

### (1) 技手、技師としての活動

本間は一八八九年九月、新潟県中蒲原郡横越村（現在の新潟市）に生まれた。一四人兄弟の末子である。本間の兄（長男）の息子、つまり甥が本間孝義（以下、孝義とする）である。一八八五年に生れた甥で、徳雄より四歳上の孝義は、新潟中学、七高を経て、一九〇三年に東京帝国大学工学部土木科に入学した。通信省臨時発電水力調査局技師を経て、一九一三年に孝義は総督府土木局に勤務した。本間はこの四歳上の甥の影響を強く受けたと思われ、後に孝義と同じ土木技術者への道を歩くことになった。

本間は一九〇四年に新潟中学に入学し、一九〇七年七月に第一高等学校二部甲を卒業した。本間は一九〇七年に東京帝国大学工学部土木科に入学した。本間は大学二年終了後の夏休みに総督府の測量実習に行った。<sup>5</sup>これは甥である孝義の紹介だろうが、おそらくこれが後に総督府に赴任する契機になったと思われる。本間は一九一五年七月に同大

表2・朝鮮総督府での本間徳雄の経歴（1916～1932年）

番号	年 月	担 当	職位	等級	上 司
1	1916年5月	土木課	技手		持地六三郎土木局長
2	1917年5月	土木課	技手		持地六三郎土木局長
3	1918年5月	土木課	技師	7等10級	宇佐美勝夫土木局長
4	1919年5月	土木課	技師	7等9級	宇佐美勝夫土木局長
5	1920年5月	土木課	技師	6等8級	西村保吉土木部長
6	1921年7月	大同江出張所所長	技師	6等7級	原静雄土木部長
7	1922年7月	大同江出張所所長	技師	5等6級	原静雄土木部長
8	1923年7月	大同江出張所所長	技師	4等5級	原静雄土木部長
9	1924年7月	工事課	技師	4等5級	原静雄土木部長
10	1925年7月	京城出張所所長	技師	4等4級	生田清三郎内務局長
11	1926年7月	京城出張所所長	技師	4等4級	生田清三郎内務局長
12	1927年7月	京城出張所所長	技師	3等4級	生田清三郎内務局長
13	1928年7月	京城出張所所長	技師	3等4級	生田清三郎内務局長
14	1929年8月	京城出張所所長	技師	3等3級	生田清三郎内務局長
15	1930年7月	京城出張所所長	技師	3等3級	今村武志内務局長
16	1931年7月	京城出張所所長	技師	3等2級	今村武志内務局長
17	1932年7月	京城出張所所長	技師	3等2級	牛島省三内務局長

『朝鮮総督府職員録』（各年度）から筆者作成。

学を卒業した。同期生は四二名であり、の中には、内海清温（後に電源開発会社総裁）、高橋三郎（後に発電水力協会会長）、田淵寿郎（後に名古屋市政監）、萩原俊一（後に東北振興電力会社理事）らがいた。また、東京帝国大学の一年先輩に久保田豊（後に鴨緑江水電社長）が、二年先輩に一九一三年に総督府に赴任した、大島清一、花井又太郎、横井増治（後に総督府土木課長）がいた。<sup>6</sup>

本間は卒業と同時に、一九一五年七月総督府土木局に赴任した。<sup>7</sup> 本間の総督府における経歴は、表2の通りである。技手を経て、一九一八年五月からは技師となる。一九一〇年代の本間については不明な部分が多い。本間は土木課に在籍中、漢江人道橋工事に関与したと思われる。明確な史料はないが、後述するように一九二五年七月に漢江が大豪雨に見舞

われ、大洪水となった。この時に本間は漢江人道橋に留まり、「この橋が壊れたら俺も死ぬよ」と平然と語ったという。<sup>8</sup> おそらく設計、施工に深く関与したと思われる。

漢江人道橋は総工費八万四千円で、一九一六年四月に着工し、一九一七年一〇月に竣工した。漢江では初の人道橋であり、第一期治道工事の重要な部分だった。<sup>9</sup> 工事では朝鮮で二番目となるニューマチックケーソン工法を導入した。漢江鉄道橋の上流六〇〇mの地点に漢江人道橋を建設した。中の島をはさむ二つの橋梁（延長四二〇m、一八〇m）を敷設した。施工は間組である。<sup>10</sup> 完成した漢江人道橋は京城府の新しい名物となり、夏の夜には装飾電灯もともされ、新しい散策スポットとして多くの散歩客が集まった。<sup>11</sup>

一九二一年二月に土木専門家の原静雄が土木部長になると、本間は同年五月に新設された大同江出張所所長に抜擢された。これは漢江人道橋工事が高く評価されたためだと思われる。本間にとって総督府に就任後わずか約六年目であり、周囲からは「異常の抜擢」とみなされた。<sup>12</sup> 一九二一年七月時点で朝鮮に土木出張所は七ヶ所（釜山、仁川、平壤、元山、京城、景福宮、大同江）しかなく、その一つのトップとなったのである。本間について、友人の内海清温は後に「君は頭脳明晰で、才能豊かな秀才であつたから、総督府で重要視され、栄達も速く」と表現しているように、事実本間のこの後の昇進は早かった。

大同江出張所の主な工事は、大同橋工事だった。大同橋は平壤市街地と対岸の工場地帯に位置し、従来は渡し舟で往来していた場所だった。大同橋は延長三四〇間（六一二m）で、幅員は車道二四尺（七・二m）、歩道両側七尺（二・

一m)、一〇連の構造だった。公道橋としては日本、朝鮮に例を見ない大規模なものだった。また、ニューマチックケーソン工事を導入した。工費は二〇三万円で、工事は一九一一年五月に着工し、一九二三年一月に竣工した<sup>14</sup>。本間の部下は、後に「橋梁にはニューマチックケーソン工法を採用された。私の記憶では鴨緑江の鉄道橋の橋梁にこの工法が使用されたのが我国では初めてで、それに次ぐ第二回目で、熟練工も求め難く、当時としては非常に困難な大工事であった<sup>15</sup>」と語っている。実際には鴨緑江橋梁、漢江鉄道橋、漢江人道橋に続き、朝鮮で四番目の工事だった。ニューマチックケーソン工事は技術や建設労働者に不安があるため、日本では一九二三年九月の関東大震災以降、隅田川の橋梁工事（永代橋、清洲橋）で初めて導入された<sup>16</sup>。しかし、朝鮮ではすでに一九〇九年の鴨緑江橋梁工事から導入されていた。ニューマチックケーソン工事を実際に担ったのは、中国人の労働者だった<sup>17</sup>。大同橋渡橋式には、齋藤実総督が自ら参加した<sup>18</sup>。工事途中の一九二三年八月、平壤一帯は大洪水に襲われた。大同江の水位も上がり、大同江橋の安全性が疑問視された。大洪水時に本間は、「大同江は未曾有の大洪水に見舞われ、工事中の橋脚は今にも押し流されそうに見えた時、「俺の設計した橋梁は絶対に大丈夫だと橋脚の上で頑張った青年技術者」と新聞に大きく報道され、その勇名は京城にも伝わって来て、我々を感動させたものであった<sup>19</sup>」という。

本間は大同江出張所所長として大同江橋工事を終えた功績により、一九二四年三月から一九二五年三月まで、約一年間海外視察を行い、ハワイ、アメリカ、ロンドン、パリ、イタリア、ドイツなどを訪問した。出発の際は第一〇回万国議院商事会議に参加する川島鉄太郎伯爵（海軍大將川島純義の長男）と同じ船に乗った<sup>20</sup>。

## (2) 京城出張所所長としての活動

帰国後、本間はさらに拔擢され、一九二五年五月に京城土木出張所所長に就任した。これから、一九三三年二月まで約七年間に亘って京城出張所所長を務めた。<sup>21</sup> 京城土木出張所は貞洞の中枢院の中にあり、一九二七年に梨花女子専門学校の隣に移転した。京城出張所は朝鮮内の出張所の中でも最も重要なポストだった。後輩の一土木官僚は後に、「本間徳雄さんは漢江改造や水力発電など水のエキスパートでありましたが、在鮮当時は橋梁のエキスパートでもあり、朝鮮で初めての人道橋である大同橋を設計施工された他、京城土木出張所所長としては漢江小橋、新延橋、錦江橋などの鉄橋を完成され、漢江大橋の基本設計をまとめられました<sup>22</sup>」と高く評価している。

一九二五年七月に漢江は大豪雨に見舞われ、大洪水となった。下岡忠治政務総監は自ら往十里、新旧龍山を視察し、帰途に教護本部を訪れた後、各避難所を慰問した。<sup>23</sup> この大豪雨の際、本間は自ら設計した漢江人道橋に留まった。「京城出張所所長の本間徳雄さんだけが橋の先端に行って帰られないのです。私は中之島が流されて内径四〇〇耗の配水管が中吊りになっているので、残って見張っていたのですが、本間さんはこの橋が壊れたら俺も死ぬよと平然としておられました。自信があったのでしょう。(中略) この漢江大橋は本間さんが設計し監督された橋でした<sup>24</sup>」という。

漢江の大氾濫を受けて、京城土木出張所は一九二六年から漢江改修工事に着手した。工事内容を本間は次のように述べている。「本計画は大正一五年度以降九箇年の継続事業として、総工費九百八十万円を以て、上流は蘆島より下



流は金浦付近に至る約十里間の堤防を築き、狭窄部はこれを掘鑿して、洪水の疎通をはかり、沿岸平野の八千町歩の防水工事を施工するものである。「一河川で一千万円近くの改修費を投ずることは相当大計画のやうに思はれるが、大正十四年度漢江大洪水の如き被害が除かる、とすれば甚だ経済的のものである。試みに大正十四年度の漢江大洪水の損害を調べてみれば、人命を失つたもの四百人、損害約四千七百万円に達し、京城府内のみとしても、その損害実に千四百万円、その他高陽郡、金浦、始興郡などの被害を加ふれば改修計画区域損害総計二千五百万円に上つてを」と、漢江大洪水の具体的な被害を指摘している。この工事の一環として、龍山付近防水工事、麻浦付近の防止工事、永登浦付近の防水工事、蘆島及び長安坪防水工事、狭窄部の掘鑿工事などが行なわれた。<sup>25</sup> 漢江改修工事のために、「竜山・永登浦・金浦に直営工場を新設」したという。<sup>26</sup>

漢江橋工事は一九二五年七月の大洪水で破損した漢江人道橋の一部を除去し、新たな漢江人道橋を敷設する工事である。漢江橋工事は突桁鋼鈑橋で、延長は四六〇m、幅員は有効幅一八・一六m、径間は一・二・二・八mが二連、二・〇・三mが九連、二・八・八mが八連だった。工事費は一二〇万円であり、施工は再び間組だった。工事は一九二七年四月に着工し、一九二九年四月に竣工した。<sup>27</sup>

一九三二年における京城出張所の工事は、漢江改修工事、仁川港工事、美湖川改修工事、漢江橋工事、新延江橋工事だった。仁川港工事は拡張工事であり、総工費は一四〇万円となる。内訳は、埋築が二万㎡、土量は七〇万㎡、護岸は一四〇〇m、栈橋は幅一〇m、延長三七m、陸上施設は道路、鉄道、上屋その他だった。<sup>28</sup> 一九三〇年六月、仁

川港拡張工事（五カ年継続）の起工式が行なわれた。本間は談話の中で、工事が竣工すれば、二千トン級の汽船五隻が一度に係留できると、その成果を強調した。<sup>29)</sup>

錦江の支流である美湖川改修工事は流域面積が一八六一㎡、流路延長は八九km、平均築堤高は六m、築堤延長一六・九km、総工費は一二三万七千円だった。<sup>30)</sup> 美湖川改修工事では一九三一年春の時点で、築堤工事の一部が二ヶ年として認可されたが、要求ミスにより片側築堤工事の予算しかなかった。このため本間は現地を訪問して、「築堤施工要領」を策定した。この中で「工場職員は手分けをして、各部落を歴訪して、常時二、〇〇〇人の労務者動員を目標の邑民の狩り出しに努力し、就労者の動員成果をあげる」ことが決定した。また、土運搬方法としては遠距離（川心より）はトローリー車により、近距離は甚だ乱暴で危険な方法であるが、堤防の間近かを大胆にも土取場に指定して、チゲによる土運搬回数増加をはかる」ことを決定した。担当者後日、この方法について「空恐ろしくて戦慄を覚える」と回顧している。<sup>31)</sup> 本間は予算不足を「邑民の狩り出し」と危険なチゲ運搬によって乗り切ったのである。

新延江橋は江原道春川郡の漢江支流新延江での建造工事だった。新延江橋はシュエドラー形トラス橋で、延長二五・二m、幅員は有効幅五m、径間は一六・二m、四連だった。総工費は三三万円である。<sup>32)</sup>

本間はこれらの工事に加えて、錦江橋の設計施工も行なった。錦江橋は忠南公州邑と長岐面とを結ぶものである。錦江橋は鋼桁橋で、延長五一・三・九m、有効幅六mであり、ニューマチックケーソン工法を用いた。工事は一九三二

年一月に着工し、一九三三年五月に竣工した。施工は長門組だった。本間は錦江橋の竣工によって、「朝鮮の道路交通上に一エポックを画するは勿論、公州のために面目を一新すること、信ずるものであります」と述べている。<sup>33</sup>

本間は橋梁工事以外に、京城の市街地開発計画にも関与した。本間は一九二六年に、「朝鮮の都市は未だ開けない時代であり、将来益々発展すべき土地である。故に都市の各般の施設を一日も早く計画樹立せねばならぬ<sup>マ</sup>ならぬ理由は明かにこゝに存するのである。（中略）朝鮮の都市は内地の一般都市に比較するに变化の程度もより激しいのである。故に今日こそ都市計画の実施を為すべき時期であると云ふ可きである」と都市計画の必要性を強調した。<sup>34</sup>また、本間は一九二九年に京城土木出張所が統監府設置以降に行なった京城市区改正事業を要約している。結論として、本間は「京城に於ける従来<sup>35</sup>の都市計画事業は予算其他の關係上其中最緊急を要する市区の改正工事即街路の整理、下水の改修等に全力を注ぎ、総て政府直轄工事として国費を投じたるものにして其総額約六百四十万円に達して居る」と述べている。

本間の考えがうかがわれる史料として、次の二点がある。第一に、本間は総督府の土木技師として、請負業者の施工能力に対して批判的な意見を持っていた。「未だ日本では昔からの慣例といふものがあつて、請負工事の仕様書とか、監督などがそれに伴つて進歩したものに出来てをらぬことは甚だ遺憾である。請負業者の技術的訓練が充分出来上つた場合には、企業者側の監督が楽になる訳であるから、事実請負業者の内容が著しく充実せられつゝ、ある今日、この点は何とかして改良したいものである」と、「請負業者の技術的訓練」を強調している。<sup>36</sup>第二に、日本人は科学

知識が稀薄だと感じていた。本間は一九三一年五月頃、日本港湾協会の総会に参加するため、大連、南満洲、北部中国を約三週間、訪問した。本間は天津における欧米列強の租界の位置を比較検討し、英国が選定した場所は「実に先見の明ある大胆な計画であつた」とする。また、平壤の電気興業会社と精糖会社が大同江の対岸船橋里に計画されたが、電気興業会社が選定した場所は「船着が殆ど出来ない地点であることが明瞭になつた」。こうした事例から見ても、本間は「日本人が政治家といはず、実業家といはず科学知識が不十分であり、又は之を輕視してをる為に、如何に損をし、又如何に国運の発展がその為に阻害されてをるか」と云ふ事を強調している。<sup>37</sup>

一九三二年七月時点で、本間の等級は三等二級だった。本間の上には、土木課長の榛葉孝平が一等三級、甥の義孝が三等一級と、二名しか存在しなかった。本間は総督府に赴任し一八年目にして、土木課の第三者の地位にまで上りつめたのである。しかし、一九三三年二月、四三歳の本間は突如、総督府を退職し、満洲国に移転した。<sup>38</sup>一九三二年七月に満洲国が設立されると、鉄道、道路、河川、都市計画等、膨大な土木事業を積極的に推進するため、満洲国は各方面から大量の土木技術者を集めた。それは、①南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄とする）、関東庁、満洲国に拠点を置く日本企業からの採用、②日本国内からの採用、③公募、④日本の高等工業学校を通して満洲国が委託生徒を募集する等、四つの方法だった。特に内務省から派遣された技術者は、一九三九年時点で六九名に及び、その主流を占めた。内務省からは、笈斌二、原口忠次郎、中島時雄、後藤憲一、本莊秀一などの技師が、後に直木倫太郎が派遣された。<sup>39</sup>おそらく満洲国から総督府にも技術者派遣の要請があったと思われる。総督府からは本間と共に、土木課技

師の町田義和、藤原健二、種谷実、内田弘四などがともに退職して、満洲国に移っていった。<sup>40</sup>

本間が総督府を退職して、満洲国に移った明確な理由は不明である。本間の近親である本間義雄（義孝の長男）は後に、「私が想像では、本府の土木課では技師から課長に栄達するのは遠い先と推定され、大きな土木事業と相当の地位の約束された新しい外地に魅力を感じたのであろう」と述べている。<sup>41</sup> おそらく正しい評価であろう。事実、榛葉孝平土木課長の在職は一四年間（一九二五～一九三九）にも及び、さらに甥の義孝が本間の上司であったこともあり、土木課長への昇格が当分は不可能であると判断したのであろう。また、本間は後に「筆者も大村顧問の招請で朝鮮総督府より駆けつけ」と言っているように、関東軍交通監督部長だった大村卓一（一八七二～一九四六）（総督府鉄道局長）の招聘も一つの契機になったと思われる。本間の後任の京城土木出張所所長には、本間の部下だった川澤章明が抜擢された。<sup>43</sup>

## 二・満洲国における活動

### （一）土木界最高の地位へ

満洲国建国直後の一九三二年三月、建設業務を担当する四つの組織（交通部鉄道司、交通部水運司、民生部土木司、総務庁需要処営繕科）が設立された。その後、組織の変遷があり、一九三三年三月、国道局が設置された。国道局は、道路、港湾、河川、都市など土木全般を担当する部署だった。一九三三年五月、藤根寿吉（前満鉄理事）が初代局長

となり、総務処長は大迫幸男、第一工務処長は本間、第二工務処長は寛斌治（一八八五～一九六二）の布陣となった。第二工務処は治水、利水を担当した。本間が担当した第一工務処は、道路計画立案と道路工事監理だった。国道局の「国道第一次計画」では、七五五〇・七kmの建設計画を立てた。国道局と同時に総理大臣の諮問機関として国道会議が成立した。構成員は総理大臣、民政部総長、交通部総長などだったが、同年六月に学識経験者として、本間、阮振鐸、国都建設局長、大迫幸男、国道局総務処長、佐藤応次郎、満鉄鉄道建設局長、岡崎文吉、満鉄経済調査会囑託など五名が指名された。<sup>44</sup> 本間の部下である工務課長には町田義和（総督府出身）、計画科長には相馬龍雄（内務省出身）が<sup>45</sup>いた。

第一工務処長として本間の至急の任務は、「国道第一次計画」の遂行だったが、これは実際には抗日武装勢力を攻撃するために必要な「一万キロ治安道路」（討伐道路）を意味した。関東軍の秋山徳三郎（一八九一～一九六八）陸軍工兵中佐（東京帝国大学土木工学科卒業）が国道局顧問として、この道路建設を指導した。本間は秋山との行動について、「道路の悪い満洲や治安の確保されぬ地域での地勢調査や路線決定は飛行機による外はない、プリモスと云ふ二人乗りのトンボの様な超小型飛行機で全満を隅々までかけ廻った<sup>46</sup>」という。しかし、内務省から派遣された寛斌治が体調をくずして退職すると、本間が彼の後を継ぎ第二工務処長となった。本間の担当は運河・水力発電、治水・土地利用である。本間の後任の第一工務処長には内務省から赴任した坂田昌亮が就任した。

一九三三年二月、直木倫太郎（一八七六～一九四三）が第二代国道局長に就任した。直木は一八九九年に東京帝

国大学工科大学土木工学を卒業後、内務省技師、大阪市港湾部長、帝都復興院の技監、復興局の技監・長官、大林組取締役兼技師長を兼任した高名な土木技術者だった。<sup>47</sup> 国道局時代の本間の部下は、後にこの頃の本間について「大小何れの事態に処してもねばり強く、説得力、実行力、見通し洞察力を発揮する方であると尊敬の念を抱いて仕えた。場馴れて交渉事にも平然と落ち着き付き、権力の前でも云う可き事は条理を尽して述べられた」と、その人柄を回顧している。<sup>48</sup>

一九三六年二月、土木学会では組織の改組が行なわれた。学会の革新化の中心である東亜部には東亜連絡委員会（久保田敬一委員長）、東亜調査委員会（中川吉造委員長）が置かれた。本間は東亜連絡委員会の委員になった。<sup>49</sup>

一九三六年十一月、「満州国産業開発五カ年計画」が決定された。この中で電力は一四〇万kWを目標とし、このうち水力発電は五九万kW（四二・一％）を予定した。こうした新経済計画を達成するため、一九三七年に入って、満洲国の土木機構は大きく改編された。同年一月、国道局は民政部土木司と合併して土木局（初代局長は直木）が新たに設立された。ここには、総務処（処長は鈴木兵一郎）、第二工務処（処長は坂田昌亮）、第三工務処（処長は原口忠次郎）を置いた。また、同年四月、新たに国務院に水力電気建設局（初代局長は直木）が設置され、河川総合開発計画の具体化を進めた。水力電気建設局には、総務処と工務処を置き、総務処長は石岡武、工務処長に本間が就任した。工務処には三科（調査科、土木科、電気科）を置いた。本間は後に同局副局長に就任した。<sup>50</sup>

初代水力発電建設局長の直木が後に大陸科学院長に転出したため、本間は一九三九年四月、第二代水力電気建設局

長に就任した。<sup>51</sup> 本間は水力電気建設局長として、満洲国の河川総合開発の責任者となった。水力電気建設局には発電所仕事を担当する地方工程処として三工程処（豊満、鏡泊湖、桓仁）を置いた。各工程処の処長は、豊満は空閑徳平、鏡泊湖は初代が後藤健一、二代が高野宗久、桓仁は内田弘四（前水力電気建設局工務処土木科長）だった。こうして本間は満洲国における三発電所建設の最高責任者となった。三発電所建設については、次節で述べることにする。

本間は満洲国の水力発電事業における河川総合計画について、次のように述べている。

「斯くの如き河川を治め、又利用するには如何しても貯水池式によるの外方法がないので有ります。即ち上流荒地の人烟稀薄なる処に彪大なる貯水池を設けて雨期間の過剰水を溜め、以て流水を1ヶ年間平均せしめ発電水力を起すと同時に之を灌漑に利用し、又航運に資すると云ふ様な事にし、又一方匪賊の母とも称せられた洪水を根本的に除去する事が出来るので全く一石二鳥策になるのであります。即ち河川の流水を完全に利用し使用し尽して海に棄てる、而も其の間総合技術を以て河水の完全利用、国土の完全開発を策するもので、之を吾々は河川総合開発案と称し満洲国主要国策の1つとしてをるのであります」と述べている。<sup>52</sup> つまり、これは戦後日本で実施された河川総合開発の先駆的な計画といえる。こうした考えから、本間はまず初めに豊満発電所、鏡泊湖発電所、桓仁発電所建設を計画した。

土木技師である本間の満洲国時代の最大の業績は、豊満発電所建設だった。満洲国の星野直樹（一八九二～一九七八）総務長官は戦後、本間を高く評価して、次のように述べた。「実行の責任を負った本間君達は、直ちに現



場に入つて地盤、流量の調査にとりかかった。なにしろ七十万キロワットと云う世界でも屈指、日本では勿論前例の無い大工事である。しかも極寒の地で冬は固く凍っている場所である。果してこんな工事が出来るだろうかと云う疑いさえあつた。又、それにはもつと経験の有る経営陣を連れて来る必要があるのではないかと云う意見もあつた。しかし、直木さんは、「そんな心配は無い。本間君で充分やつていける。」と平然と云い切つた。(中略)最初から最後迄、非常なる自信と誇りとを以つて、此の一大事業の達成に尽くした本間徳雄君の努力を長く記念したいものと思ひ、ここに一文を草した。この人今やなし、靈魂は今や君の手塩に掛けしダムを眺めて、心安らかに眠つて居られる事であらう<sup>53</sup>」。

また、部下である豊満工程処の空閑徳平処長は本間の性格を次のように述べている。「本間さんの頭脳明敏さについては、今更私が喋々するまでもなく、全て周知のことであつたが、科学的、技術的分野は勿論、広い常識と共に、あらゆる面で脳内の閃きは縦横無尽、そして工事現場で非常な障礙に遭う度に、その都度、新工法を考案され、その御指示によつて、私共はあの難工事を完成に導くことが出来た。右のようなことは枚挙に暇がないが、その中でも松花江内に工事上の仮締切の築堤をやつた時、水上作業で達磨籠を利用し、更に後日之が排除のために簡易吊下げケイソンを使用したこと、又左岸二次締切に寒中での水中コンクリート工法の提案などが、特筆すべきものだった<sup>54</sup>」と指摘している。「工事現場で非常な障礙に遭う度に、その都度、新工法を考案」する本間の強い性格は、朝鮮時代にも部下から指摘されていた。

一九四二年七月に大東亜電力懇談会が東京で開催され、本間は満洲国代表の一員として参加した。<sup>55</sup> 本間は一九四三年三月に満洲土木学会会長に就任し、満洲国の土木技術界の最高位となる。満洲土木学会は一九四〇年九月に設置され、初代の会長は佐藤応次郎（満鉄副総裁）、副会長は平山復二郎（満鉄理事）、坂田昌亮（満洲国交通部技監）、本間は調査部長だった。その後、会長は平山復二郎、坂田昌亮を経て、本間が第三代会長に就任した。満洲土木学会の会員は約三千名で、機関紙『土木満洲』を刊行した。<sup>56</sup>

本間は一九四三年、『土木満洲』に、「吾吾の有する技術、或いは研究が直ちに敵を打つ弾丸になり、または大砲たらしめねばならぬのであります」<sup>57</sup>と、土木技術による戦争勝利を強調した。また、本間は一九四四年には『土木満洲』に、「科学的及び實際的方面より最高度の創意と、研究に基き徹底せる戦時設計、戦時規格を採用し、最小限度の労力と資材を以って最短期間に最大の効果を挙げるべく結集せねばならぬ」<sup>58</sup>と述べた。本間は一九四三年九月、豊満発電所建設の功績により、勲二位景雲章を受け、親任官待遇となった。<sup>59</sup>

満洲国では水力電気建設局とは別に、一九三四年一月に多くの電気会社を統合し、満洲電業（資本金六〇〇〇万円）が設立された。社長は吉田豊彦（関東軍顧問・陸軍大将）である。<sup>60</sup> 長くこれらは民間組織として運営された。しかし、満洲国内で電気事業の国家管理の動きが強まり、電気事業は水力・火力発電事業を一つに統合することになった。この結果、水力電気建設局と満洲電業が合併し、一九四四年四月に新しい満洲電業が設立された。資本金は六億四千万円となり、会長は韓雲階、理事長は平島敏夫、本間は副理事長に就任した。<sup>61</sup> 一九四五年八月、日本は連合

国に対して無条件降伏を行った。これによって満洲国は崩壊した。同年一〇月、本間と中華民国資源委員会（以下、資源委員会とする）東北電力総局長郭克梯の間で、満洲国内の満洲電業の総資産の引継ぎが行われた。<sup>62</sup>

## （二）三発電所建設の概要

本間は水力電気建設局長として、発電所工事を担当する地方工程処として三工程処（豊満、鏡泊湖、桓仁）を統括した。各工程処の責任者は、豊満発電所は空閑徳平、鏡泊湖発電所は後藤健一、高野宗久、桓仁発電所は内田弘四だった。以下、三発電所の概要を見てみる。

### ①豊満発電所

建設の目的は、①松花江の洪水の完全徐水、②発電設備七〇万kW、③下流平野十七万結の開田灌漑（産米年間三百万石増産）、④飲料水、工業用水の水源確保、⑤松花江の平水増加による航運への寄与だった。豊満発電所は、松花江水系第二松花江二四kmの地点に巨大なダムを建設し、大容量電力を得るものである。豊満ダムは重力式コンクリートダムで、堤高九一m、堤頂長一一〇m、堤体積二二〇万m<sup>3</sup>である。これによる貯水池は面積五四五m<sup>2</sup>、長さ一七〇km、貯水量一一〇億m<sup>3</sup>とほぼ琵琶湖の大きさであり、水没戸数は八千戸に達した。豊満発電所は有効落差六六mで、最大出力七〇万kW（完成時）の発電能力を持つ。水車は総数一〇基で第一期は八基とした。発電機は第一期に八基を設置した。工事費は当初は一億円だったが、後に二億円に増額された。工事は建設業者に依頼せず、直営で行われた。発電所は東亜土木企業が受注した。工事現場は半年間も凍結する酷寒の地であり、ここに基礎掘削量

百九〇万㎡、使用コンクリート総量二二四万㎡を使用する大工事であるため、多くの困難に直面した。日本人技術者と朝鮮人技術者が合わせて約五〇〇名に達し、その他中国人技術者も五〇〇名いた。<sup>63</sup>

豊満工程処長の空閑徳平は日本におけるコンクリートダム建設の専門家だった。空閑は富山県の祖山ダム（堤高六九・五m）の建設に参加した後、広島県の王泊ダム（堤高五九・四m）、宮崎県の塚原ダム（堤高八〇m）と、国内でハイ・ダム建設の主任技術者を経験していた。<sup>64</sup>

工事是一九三八年一〇月に着工し、一九四三年三月に発電を開始した。同時期に鴨緑江に築造された水豊ダム（堤長一〇六・四m、堤頂長八九九・五m、堤体積三三三万㎡）と並び、世界最大級の重力式コンクリートダムだった。この点で、豊満ダム、水豊ダムは戦前の日本における土木技術の最高峰を示すものだった。<sup>65</sup>しかし、その一方では日本の侵略的な側面を示すのが労働者の集め方とその待遇だった。豊満ダム工事には一日約一五〇〇人の労働者を動員した。主に大東公司を通じて、中国人労働者を雇用した。しかし、労働力不足のため、捕虜兵、囚人、国民勤労奉公隊までも動員する。日本側は、全工期の死亡者数は約一〇〇〇名で、約九四〇人（九四％）は病死者（チフス、発疹チフス）であり、約六〇人（六％）は事故死者と主張した。一九四五年八月の時点でコンクリートの打設量は八七％であり、未完成だった。<sup>66</sup>本間には戦後になって、国民勤労報国隊が大きな問題になったことを語っている。「終戦後すぐ、今のカベ新聞みたいなものが発刊された。日本の罪悪史を21カ条並べたてうち勤報隊は2、3番目だ（笑）。強制労働だというので、この21ヶ条のどれかに関係した者はつかまるんだから」。これは中国人労働者と並んで、国民

勤勞報國隊が中国人に大きな苦痛を与えたことを示している。<sup>67</sup>

## ② 鏡泊湖発電所

牡丹江水系の牡丹江省寧安県に水路式隧道を築造し、鏡泊湖発電所で三万六千kWを得るものである。貯水池は鏡泊湖とし、流域面積は一一五〇〇k<sup>2</sup>m、貯水池面積は八〇k<sup>2</sup>mである。有効落差は六四m、水路は鉄筋コンクリート円形水圧隧道で、直径五・六m、延長三千mである。総工費は約二千万円で、工事は一九三九年三月に開始し、約三年後の一九四二年六月に発電を開始し、同年九月に竣工した。送電線は間島省まで一〇万Vを完成した。<sup>68</sup>

## ③ 桓仁発電所

鴨緑江支流渾川の安東省桓仁県に桓仁ダムを築造し、桓仁発電所で一〇万八千kWを得るものである。桓仁ダムは重力式コンクリートダムで、堤高一二五m、堤頂長六七〇m、堤体積一六〇万m<sup>3</sup>である。ダムの堤体積は巨大で、豊満ダムの約七三%にも匹敵する。貯水池は面積二一四k<sup>2</sup>mである。工事は豊満発電所の発電開始前年、一九四二年三月に着工した。本体工事は右岸締切工事を完了し、同締切内に七・五万m<sup>3</sup>のコンクリート打設中に敗戦となった。<sup>69</sup>

## 三・敗戦後の活動

### (1) 中国での活動

敗戦直後の一九四五年九月、本間は資源委員会東北電力総局顧問となった。<sup>70</sup> 資源委員会はすでに一九三二年一月朝鮮総督府の土木官僚本間徳雄の活動(広瀬)

に設立された後にいくたびか改編され、国民政府の鉱・工業建設機関として重要な役割を果たしていた。一九四六年五月に資源院会は国民政府と共に南京に戻り、行政院の直属機関となった。一九四五年八月以降、資源委員会の最も重要な活動は「国家復興計画」の一環として、日本企業が置いていった「敵産業」の接収工作だった。資源委員会が接収した産業は、電力、石炭鉱業、石油工業、その他、の四つに大きく分けられた。満洲国には豊満発電所を初め多くの発電所があったが、ソ連軍が各発電所の発電施設を戦利品として撤去・破壊したため、資源委員会が実際に接収した発電所の発電容量数は約二〇万kWに過ぎなかった。<sup>71</sup> 資源委員会は一九四六年末までに、三二億六六〇〇万元（一九三七年の価格で約一〇億ドル）と評価される二九二の大規模日本企業を接収した。資源委員会はこれらの企業を、三万三千人の職員と二二万人の労働者を擁する九四の企業集団に改組した。資源委員会は新たに「国営工業三年建設計画」をまとめ、一九四六年以降、九億二三〇〇万元を投資し、鉄、アルミニウム製品、蒸気タービン、発電機、電線・ケーブル等を大規模に生産する予定だった。一九四七年資源委員会傘下企業は、電力で見ると全中国の発電量の八三％を生産した。<sup>72</sup> 本間は資源委員会のこうした電力増産活動に深く関与したと思われる。

一九四六年三月、本間は中華民国国立東北大学工学部教授兼任となった。<sup>73</sup> おそらく東北大学工学部で講義をおこなったのだろう。東北大学は一九二二年に遼寧省の瀋陽に設立された。初代の校長は王永江で、当初は文法科学部、理工科学部の二学部を設置した。第三代校長に張学良が就任したこともあり、大量の運営資金が投入され、大学の規模は急速に拡大した。満州事変以降は瀋陽を離れ、一九三一年九月に北平（北京）、一九三六年二月に西安、

一九三八年三月に四川省三台县へと避難を続けた。一九四六年にようやく瀋陽に戻ってきた。<sup>74</sup>

中国東北部の混乱の中、本間は政治的な苦境に立つこともあった。本間の部下は、その場面を「戦後満洲の地は国民軍、共産軍、ソ聯軍が交互に進駐して来て、本間さんにも旧利権の追及が及び、再三苦境に立たされることもあった」と証言している。中国滞在期を本間は後に、「蒋介石の中華民國の懇望で三年許り居残ったが、蒋政権の形勢は日に日に非、朝に一城夕に一城の有様、奉天城の陥落寸前、米軍の救援飛行機で中共の手を逃れた」と回顧している。<sup>75</sup>

## (2) 日本での活動

一九四八年六月、五九歳の本間はようやく中国から日本に帰国した。<sup>77</sup> 本間は一時期豊建設会社に入社し、静岡県御殿場の道路建設に従事した。<sup>78</sup> 一九四九年に東京都水道局技術顧問となり、小河内ダム建設に関係した。後に、埼玉県総合開発審議会委員、小金井市都市計画審議会委員会委員兼任となった。<sup>79</sup> 小河内ダム建設の計画は東京市により一九三一年に発表されたが、地元や下流水利権者の反対でその交渉は難渋した。一九三八年一月に起工したが、戦時下のため一九四三年一〇月に工事は中断していた。戦後の一九四八年九月に再び着工し、一九五七年一月に完成した。小河内ダムは重力式コンクリートダム、堤高一四九m、堤頂長三五三m、堤体積一六七万五六八〇m<sup>3</sup>である。小河内ダムの堤体積は本間が満洲国で監督した豊満ダムの約八〇%だった。小河内発電所の出力は一万九千kWである。調整池は流域面積二六二・八八km<sup>2</sup>、満水面積は四・二五km<sup>2</sup>である。工事の死者は八六名（戦前二五名、戦後六一名）と多く、日本人は八〇名、朝鮮人は六名（戦前五名、戦後一名）だった。工事では、吉田徳次郎（コンクリー

ト・前九州大学教授）、小野基樹（水道・前東京市水道局長）、鈴木雅次（港湾・内務省技監）、久保讓（水道・前東京市水道局）、久保田豊（発電・前鴨緑江水電社長）、本間の六名が技術顧問となった。<sup>80</sup> 本間を通して満洲国におけるダム施工技術はこのよう形で日本に還流したといえる。

本間は一九五三年二月に（社）日本開発技術協会（以下、協会とする）を設立し、理事長に就任した。一九五六年までは、主に県、大企業より発電水力に関する調査設計を受託した。業務規模は年二〇〇～五〇〇万円程度だった。一九五七年以降は、東京都の委託を受注した。協会の理事は一七名、監事二名、顧問三名であり、全員が東京大学（土木、電気、農業）の卒業生である。陣容は、常任理事一名、参事二名、研究員三名、事務員一名である。当初は営業活動を行わず、トップ営業だけで仕事を受注した。<sup>81</sup> 毎年、一、二件は比較的大きな業務を受注した。一九五三年は琵琶湖電源開発実施設計（滋賀県）、一九五四年は二瀬発電所実施設計（埼玉県）、荒川第一発電所実施設計（日本水素）、一九五五年はラグマン発電所実施設計（アフガニスタン）、大洞発電所実施設計（埼玉県）、一九五六年は荒川第二発電所実施設計（日本軽金属）などだった。二瀬発電所実施設計は本間自らが五万分の一の地図でダムサイトを発見し、埼玉県に進言したのが契機だった。本間は「老齢にもかかわらず、率先して荒川各支流の末端迄度々踏査」した。荒川第一発電所は新潟県坂町に河口を持つ荒川にダム式発電所を建設する計画だった。この計画は後に日本水素から日本軽金属に移管された。ラグマン発電所実施設計は安達達法政大学教授（元総督府調査官）らと共にアフガニスタンの首都カブールに到着した。陸路でラグマンまで行き、現地調査を行った。<sup>82</sup>



本間は友人関係、協会独自の営業活動を続けた。しかし、この時期から同業者は次々と誕生し、競争は激化した。協会も利益追求の会社組織に変更する必要に迫られた。このため、本間は一九六三年三月に協会を発展的に解消し、(株)開発コンサルタントを設立して、社長に就任した。資本金五〇〇万円である。これには朝鮮、満洲国で本間の部下だった内田弘四が社長を務める大豊建設の特別な支援があった。営業種目としては、「建設事業の調査、計画及び設計」、「水力発電、其他構造物の基礎工法に関する調査、研究及び設計」などだった。わずか一年三ヶ月後の一九六四年六月に本間は社長を退き、会長となった。第二代社長は伊藤令二である。<sup>83</sup>

晩年の本間の姿を、長男は「毎日庭や植木いじりに過し、週に二回程度会社に行き、その帰りに、学士会館や大豊建設の内田社長（現会長）の所へ将棋や碁をさしに行くのを楽しみにしていました」<sup>84</sup>と述べている。一九七二年二月に甥である義孝が死亡した。<sup>85</sup>約二年後の一九七四年一月、本間は死亡した。享年八四である。本間の葬儀では一高、東京大学で同期だった内海清温、総督府と満洲国で本間の部下だった内田弘四大豊建設社長、(株)開発コンサルタントの伊藤令二社長の三人が弔辞を読んだ。<sup>86</sup>

### (3) 本間の過去の工事認識

本間は敗戦前に自分が朝鮮、満洲国で行った土木工事を、戦後はどうのように認識していたのだろうか。一九六六年、七六歳の本間は朝鮮での土木活動を次のように述べている。まず、日本が朝鮮で行なった土木工事全般の評価である。本間は「日本は、ここ〔朝鮮＝広瀬〕の住民のため、各種の文化施設をして、住みよい土地にする政治をした

のである。従つて、国土建設などの土木事業が、第一番に取り上げられたのだと思う。実績からいって、伊藤統監以来、歴代総督も、そのために非常に努力せられた形跡が残つておる。(中略)日本は、自国の勢力下に入つたところは、国土開発の仕事をまず第一にやる。考えれば馬鹿げたことのものであるが……(中略)このような朝鮮の大土木施設のはほとんどは、日本の予算で賄われたもので、相当巨額の国費が投じられている筈である」と述べている。特に欧米諸国が植民地(東南アジア、インド)を支配した時、「その国土全体の開発とか改良とかいうような仕事はさっぱりやっていない」と批判した。<sup>87</sup>これらとの対比で、日本の朝鮮での土木仕事を高く評価している。

続いて、各種土木工事の評価である。本間は鉄道、港湾、道路、都市施設、河川改修、利水計画、水力発電などに具体的に触れ、最終的に次のように結論付けている。「私共の眼から見た土木事業について、公平に見てこれはよくできているなどと思う施設を挙げてみると、まず、港湾施設である。これは確かに相当の誇りとしてよいと思う。(中略)道路は、これはまだ何としても当時の国情から見てやむを得ぬものがあつたと思う。但し、道路に付随して、どうしても必要となる橋梁については、朝鮮の三大橋と呼ばれていた大同大橋(大正一二年竣工)、咸興の城川江に架かる万歳橋(昭和四年竣工)、および京城漢江の漢江大橋(旧鉄橋は大正六年十月竣工・架け替えの新大橋は昭和四年九月竣工)などは代表的なものであるが、これらは何れも、幸いなことに私の所管時代に完成させることができた。(中略)概して、道路はあまり自慢できなかったものであるが、河川改修事業と港湾事業及び水力電気は、国造り、国土改良事業として相当目覚ましいものではなかったかと思う次第である」と、<sup>88</sup>港湾、河川改修、水力電気を高く評

価している。

本間は総督府の土木工事は朝鮮人のために行ったものであると理解している。しかし、その一方、これらの土木工事が日本の朝鮮における治安対策と密接な関係を持っていたことも正直に指摘している。「鉄道、港湾、道路など交通関係の仕事は治安保持にも密接な関係があるので、その面からも第一に採り上げられたことと思う<sup>89)</sup>と述べている。

第二に、満洲国での活動をどのように理解していたのか。一九六四年、七五歳の本間は満洲国の工業化を次のように回顧している。「日本の大工業会社がこぞって満洲国法人としての子会社を持つような氣運を生じ、奉天鉄西大工業地帯のようなものが一朝にして蜃気楼的に出現し、まるで日本工場のデパートのごとき光景を呈した。これが敗戦とともに燎爛鉄西文化も一夢と消え失せたが、民族興亡史の一駒と嘆ずるより外はない<sup>90)</sup>と、「民族興亡史」的な立場から振り返っている。また、豊満発電所建設に関して、本間は次のように述べている。「本計画はあまりにも大規模で、日本内地等では想像もできないようなものであった。いかに満州が人煙希薄と言っても、三万町部の耕地と八千戸の人家を水没せしむるということは容易な仕事ではなかった。半年凍結している冷寒地で、二百万立方メートルのコンクリー打ち（日本小河内ダムは百五十万）しかも早急を要するので無理な工程であった。松花江の締め切り工事等も技術的には興味深いものであって、これによってたくさんの新技術が生れたのも当然である」と、計画自体にかなり無理があったことを認めている。また、本間は自分の功績には触れず、「本計画は前述のごとく満洲国としては国力をあげての大事業であった。従って誰が作ったということなく国力の総力結集で自然にでき上がったような

格好であった」と謙遜している。<sup>91</sup>

第三に、戦後日本をどのように認識していたのか。一九七三年、八三歳の本間は次のように述べる。「終戦後日本帝国欽定憲法は廃止、マッカーサー制の米国押付け憲法の時代となった。元より日本の弱体化を狙って借着故、寸の合わない所が沢山ある。忠君・愛国・孝行等の文字は余り見受けられない。親子の殺傷事件でも判決は無関係の様だ。これは余りにも極端で、人間と動物の区別がなくなってしまう。又進化論の原理にも、もともとと思う。即ち私は国家組織の最下部単位として家族制度を残し、幼児や老人の福祉問題は同族間で処理することにある。これが真の福祉国家で極楽浄土でもある」と述べている。<sup>92</sup>つまり、晩年の本間は保守主義者であり、家族主義者であり、戦後の風潮に批判的だった。

## おわりに

以上述べたことを要約すれば、以下の通りである。

本間徳雄は東京帝国大学工学部を卒業し、一九一五年に朝鮮総督府に入り、一九三三年まで一八年間勤務する。大同江出張所所長、京城出張所所長を務め、特に大同橋、漢江橋などを設計し、橋梁工事の第一人者になる。総督府土木課では第三位まで上るが、上位には長く土木課長を務めた榛葉孝平、甥の本間孝義がおり、これ以上の地位を望めぬと判断し、一九三三年満洲国に移った。

本間は満洲国で土木界の重鎮となり、国道局第一工務科長、同第二工務科長、水力電気建設局長、満洲土木学会会長、満洲電業副理事長を歴任した。一九三九年からは水力電気建設局長として、豊満発電所、鏡泊湖発電所、桓仁発電所建設を指揮した。特に豊満発電所は当時世界最高級の重力式コンクリートダムだった。この工事は日本の高い土木技術力を示したが、一方では多くの中国人労働者が犠牲者になった。

敗戦後は国民政府によって抑留され、資源委員会東北電力総局顧問、東北大学工学部教授を務めた。一九四八年に日本への帰国後も本間は土木事業に従事した。一九五三年に日本開発技術協会を創設し理事長を、一九六三年に開発コンサルタントを創設し社長を務めた。このような活動を通じて、朝鮮、満洲国での土木技術は日本に還流した。

1 広瀬貞三「朝鮮総督府の土木官僚」、松田利彦・やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』（思文閣出版、二〇〇九年）二六〇～三〇二頁。

2 前掲広瀬貞三論文「朝鮮総督府の土木官僚」、前掲書『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』二六四～二七八頁。

3 本間三保子編『本間徳雄を偲んで』（同人、一九七七年）。（以下、『偲んで』とする）。

4 本間孝義の経歴は、榛葉孝平・本間孝義・本間徳雄『朝鮮の国土開発事業』（友邦協会、一九六七年）三一頁。

5 内海清温「畏友本間徳雄君を偲ぶ」、前掲書『偲んで』五六頁。

6 東大土木同窓会編『東大土木同窓会・会員名簿』（同会、一九八一年）一四頁。二人の同期生については、以下を参照。内海清温は、内海清温先生追想録刊行会編『内海清温』（同会、一九八五年）、田淵寿郎は、田淵寿郎『ある土木技師の半自叙伝』（中

- 部経済連合会、一九六二年）、田淵寿郎氏追想録編集委員会編『田淵寿郎氏を偲ぶ』（同会、一九七五年）参照。
- 7 「略歴」、前掲書『偲んで』三三二頁。
- 8 山岸庄治「漢江大水害の思い出」、内田襄編『朝鮮時代の思い出』第二集（同人、一九八六年）五五～五六頁。
- 9 一九一〇年代の道路工事については、広瀬貞三「一九一〇年代の道路建設と朝鮮社会」『朝鮮学報』一六四号（一九九七年七月）参照。
- 10 서울特別市編纂委員会編『漢江史』（同市、一九八五年）四九六～四九七頁。間組百年史編集委員会編『間組百年史・一八八一～一九四五』（同社、一九八九年）二〇五～二〇八頁。（以下、『間組百年史』とする）。
- 11 申明直著岸井紀子・古田富建訳『幻想と絶望―漫文漫画で読み解く日本統治時代の京城』（東洋経済新報社、二〇〇七年）五八～五九頁。
- 12 中島時雄「本間先輩を偲ぶ」、前掲書『偲んで』八〇頁。
- 13 内海清恩「畏友本間徳雄君を偲ぶ」、前掲書『偲んで』五二頁。
- 14 本間徳雄「大同橋に就いて」『朝鮮』一〇二号（一九二三年一〇月）二四二～二四六頁。
- 15 中島時雄「本間先輩を偲ぶ」、前掲書『偲んで』八〇頁。
- 16 内務省復興局によって隅田川に築造された六橋梁については、伊東孝『東京の橋―水辺の都市景観』（鹿島出版会、一九八六年）九〇～一六〇頁参照。
- 17 鴨緑江橋工事については、朝鮮総督府鉄道局編『鴨緑江橋梁工事報告』（同局、一九二二年）、前掲書『間組百年史』一七一～一八五頁参照。
- 18 本間三保子「追憶の記」、前掲書『偲んで』二六七～二六八頁。
- 19 町田義知「本間さんの思い出」、前掲書『偲んで』七三頁。
- 20 口絵写真、前掲書『偲んで』頁数なし。

- 21 各出張所では詳細な出張所工事誌を作成した。現存する出張所工事誌としては、清津、鎮南浦、沙里院、平壤、仁川、京城、群山、釜山、麗水の九ヶ所がある。国家記録院『朝鮮總督府記録物召録선가이三』(同院、二〇〇八年)参照。
- 22 福西正雄「京城出張所と本間徳雄さん」、前掲書『偲んで』八八頁。
- 23 三峰会編『三峰下岡忠治伝』(同会、一九三〇年)二八八～二九〇頁。
- 24 山岸庄治「漢江大水害の思い出」、前掲書内田襄編『朝鮮時代の思い出』第二集、五五～五六頁。一九二五年の大水害に関して、有賀信一郎編『乙丑漢江洪水誌』(乙丑漢江洪水誌編纂所、一九二五年)、朝鮮總督府内務局土木課『天正一四年朝鮮ノ洪水』(同課、一九二六年)参照。
- 25 本間徳雄「漢江改修計画に就て」『朝鮮土木建築協学会報』一一一号(一九二七年八月)一四～一五頁。詳細は、朝鮮總督府『朝鮮河川調査書』(同府、一九二九年)六〇三～六五四頁、朝鮮總督府『朝鮮土木事業誌(昭和三年迄)』(同府、一九三七年)三〇九～三二四頁参照。
- 26 福西正雄「京城出張所と本間徳雄さん」、前掲書『偲んで』八八頁。
- 27 本間徳雄「朝鮮總督府内務局京城出張所の事業(二)」『土木建築工事画報』八卷四号(一九三二年四月)二八～三〇頁。前掲書『間組百年史』三八九～三九〇頁。
- 28 本間徳雄「朝鮮總督府内務局京城出張所の事業(一)」『土木建築工事画報』八卷三号(一九三二年三月)二八～三九頁。
- 29 『毎日申報』一九三〇年六月三日。
- 30 本間徳雄「朝鮮總督府京城出張所の事業(一)」『土木建築工事画報』八卷三号(一九三二年三月)三五～三七頁。仁川港工事の詳細は、前掲書『朝鮮土木事業誌(昭和三年迄)』七七三～八〇四頁参照。
- 31 中村佳教「美湖川改修の思い出」、前掲書『偲んで』一〇二～一〇四頁。
- 32 本間徳雄「朝鮮總督府京城出張所の事業(二)」『土木建築工事画報』八卷四号(一九三二年四月)三一頁。
- 33 本間徳雄「錦江橋の設計概要」『朝鮮土木建築協学会報』一六二号(一九三二年二月)九～一〇頁。

- 34 本間徳雄「今日こそ京城都市計画の好機である」『朝鮮と建築』五輯七号（一九二六年七月）一五～一七頁。
- 35 本間徳雄「京城の都市計画について」『朝鮮と建築』八輯四号（一九二九年四月）二七～三一頁。京城の都市計画工事に関して  
は、前掲書『朝鮮土木事業誌（昭和三年迄）』一〇三六～一〇四六頁、孫禎睦『日帝強占期都市計画研究』（一志社、一九九〇年）  
一一五～一七六頁、廉馥圭『서울의 起源 京城の誕生—1910-1945 都市計画의 로운 京城의 歴史』（이데아、二〇一六年）参照。
- 36 本間徳雄「工事監督に就いて」『朝鮮土木建築協会会報』一〇四号（一九二七年一月）一九～二〇頁。
- 37 本間徳雄「富国の源、科学知識」『朝鮮土木建築協会会報』一六〇号（一九三一年七月）五～七頁。
- 38 「略歴」、前掲書『偲んで』三三一頁。
- 39 西澤泰彦「満洲国」の建設事業」、山本有造編『満洲国』の研究』（京都大学人文科学研究所、一九九三年）三八三～三八八頁。
- 40 町田義和「本間さんの思い出」、前掲書『偲んで』七三頁。
- 41 本間義雄「徳雄大叔父」、前掲書『偲んで』二一九頁。
- 42 本間徳雄「関東軍特務時代の秋山中佐を偲ぶ」、秋山徳三郎追想録編集委員会編『秋山徳三郎君を偲ぶ』（新光道路株式会社、  
一九六八年）一一五頁。大村卓一については、大村卓一『大陸に在りて』（勝進社、一九四四年）、大村卓一追悼録編纂委員会  
編『大村卓一』（同会、一九七四年）参照。
- 43 川澤章明が裡里出張所所長時に行った万頃江改修工事については、広瀬貞三「植民地期朝鮮における万頃江改修工事と土地収  
用令」『福岡大学研究論集A…人文科学編』一〇巻三号（二〇一〇年十一月）、松本武祝「植民地朝鮮における河川改修工事を  
めぐる「公共性」—全羅北道・万頃江改修を事例として」『日本植民地研究』二七号（二〇一五年六月）参照。
- 44 「略歴」、前掲書『偲んで』三三二頁。前掲論文西澤泰彦「満洲国」の建設事業」、前掲書『満洲国』の研究』四〇三頁。
- 45 大淀昇一「宮本武之輔と科学技術行政」（東海大学出版会、一九八九年）一九一頁。
- 46 前掲論文本間徳雄「関東軍特務時代の秋山中佐を偲ぶ」、前掲書『秋山徳三郎君を偲ぶ』一一五～一一八頁。秋山は一九三六年  
一二月に陸軍航空本部第二部長、一九四一年一月に陸軍築城本部長、一九四四年一月に陸軍燃料本部長等を歴任した。



- 47 直木倫太郎については、国土政策機構編『国土を創った土木技術者たち』（鹿島出版会、二〇〇〇年）二六八～二七五頁、前掲書『土木人物事典』二〇九～二一〇頁参照。
- 48 本莊秀一「本間徳雄先生を偲ぶ」、前掲書『偲んで』一三〇～一三二頁。
- 49 前掲書大淀昇一「宮本武之輔と科学技術行政」二〇一頁。
- 50 「略歴」、前掲書『偲んで』三三二頁。
- 51 「略歴」、前掲書『偲んで』三三二頁。
- 52 本間徳雄「満洲国水力電気事業に就て」『土木学会誌』二五卷五号（一九三九年五月）四三一～四三九頁。満洲国における電気事業については、堀和生「満洲国」における電力業と統制政策『歴史学研究』五六四号（一九八七年十二月）、須永徳武「満洲における電力事業」『立教経済学研究』五九卷二号（二〇〇五年一〇月）参照。
- 53 星野直樹「本間徳雄君と豊満ダム」、前掲書『偲ぶ』四五～五五頁。原本は、星野直樹『見果てぬ夢―満洲国外史』（ダイヤモンド社、一九六三年）である。
- 54 空閑徳平「本間さんの思い出」、前掲書『偲んで』一一一～一二四頁。
- 55 『日本工業新聞』一九四二年七月一六日。神戸大学付属図書館データベース。
- 56 土木学会八〇年史編集委員会編『土木学会の八〇年』（同会、一九九四年）二三一～二三四頁。
- 57 本間徳雄「就任の辞」『土木満州』三卷四号（一九四三年八月）一頁。
- 58 本間徳雄「年頭所感」『土木満州』四卷一・二号（一九四四年二月）一頁。
- 59 「略歴」、前掲書『偲んで』三三二頁。
- 60 満洲電業の設立過程は、『満洲電業史』編纂委員会編『満洲電業史』（同会、一九七六年）二五～九四頁参照。
- 61 前掲書『満洲電業史』四一九～四二〇頁。
- 62 内田弘四編『豊満ダム―松花江堰堤発電所工事実録』（大豊建設、一九七九年）七頁。（以下、『豊満ダム』とする）。

- 63 前掲論文本間徳雄「満洲国水力電気事業に就て」『土木学会誌』二五卷五号（一九三九年五月）、前掲書『満洲電業史』五七一  
 ～五九五頁、前掲書『豊満ダム』、南龍瑞「『満洲国』における豊満発電所の建設と戦後の再建」『アジア経済』四八卷五号  
 （二〇〇七年五月）二二二〇頁。
- 64 広瀬貞三「軍需景気と電力建設工事」、玉城素編著『産業の昭和社會史⑫土木』（日本經濟評論社、一九九三年）一六〇頁。空  
 閑は満洲国から日本に帰国した後、戦後は鹿島建設に入社した。空閑徳平『コンクリート重力ダムの施工法』（鹿島建設技術研  
 究所、一九四九年）参照。
- 65 水豊ダム建設については、前掲書『間組百年史』六三四～六四九頁。この項は広瀬貞三が執筆した。
- 66 前掲書『豊満ダム』六二～六八頁。
- 67 「満洲における満洲国工事・座談会記録（3）」、土木工業協会・電力建設業協会編『日本土木建設業史』（技報堂、一九七一年）  
 八六八頁。
- 68 前掲論文本間徳雄「満洲国水力電気事業に就て」『土木学会誌』二五卷五号（一九三九年五月）四三九頁。満史会編『満洲開發  
 四十年史』下巻（謙光社、一九六四年）五六一～五六二頁。本間徳雄「豊満ダム」、満洲回顧集刊行会編『あ、満洲―国つくり  
 産業開發者の手記』（同刊行会、一九六五年）一九三～一九五頁。前掲書『豊満ダム』一二二～一二四頁。
- 69 前掲書『豊満ダム』一一一～一二二頁。
- 70 「略歴」、前掲書『偲んで』三三三頁。
- 71 阮炳嵐「資源委員會の組織及び活動」『オイコノミカ』三五卷二号（一九九八年一月）三七～六四頁。この資料は、小林元裕  
 氏（東海大学文学部）のご教示による。
- 72 程麟蓀著閔智英訳「国民政府資源委員會とその人民共和國への遺産」、久保亨編著『一九四九年前後の中国』（汲古書院、  
 二〇〇六年）一三九～一五九頁。この資料は、小林元裕氏（東海大学文学部）のご教示による。
- 73 「略歴」、前掲書『偲ぶ』三三二頁。

- 74 中国・東北大学 (<http://neueduon/>)。(二〇一七年五月五日確認)
- 75 大畑活三「満洲より日本へ」、前掲書『偲んで』一五九～一六四頁。
- 76 本間徳雄「身辺雑記」『カナオ会報』九号(一九六八年五月)、前掲書『偲んで』一七頁。
- 77 「略歴」、前掲書『偲んで』三三三頁。
- 78 本間三歩子「追憶の記」、『偲んで』二八六頁。
- 79 「略歴」、前掲書『偲んで』三三三頁。
- 80 東京都水道局『小河内ダム』(同局、一九三七年)頁数なし
- 81 杉浦朝太郎「本間徳雄先生を悼む」、前掲書『偲んで』三七三～三七六頁。
- 82 長谷部巖「本間先生の社団法人日本開発技術協会」、前掲書『偲んで』一七一～一八五頁。開発コンサルタント株式会社『二十年の歩み』(部外秘)(同社、一九八三年)一二～一七頁
- 83 長谷部巖「本間先生の社団法人日本開発技術協会」、前掲書『偲んで』一七一～一八五頁。伊藤は一九〇二年生れで、一九二七年東京帝大を卒業した。その後、富山県技師、内務省、建設省に勤務したダム工学の権威だった。伊藤の社長在任期間は一九六四年から一九七六年まで、約一二年間に及んだ。前掲書『二十年の歩み』(部外秘)六三～六四頁。このうち、二〇〇七年二月に株主開発コンサルタントは株主開発虎ノ門コンサルタントと改称した。二〇〇八年七月時点で資本金は四〇〇〇万円、従業員は一五一名である。開発虎ノ門コンサルタント『未来に向かってー開発虎ノ門コンサルタント株式会社』(同社、二〇〇八年)二二頁。
- 84 本間春海「父徳雄」、前掲書『偲んで』二八八～三〇三頁。
- 85 本間義雄「徳雄大伯父(法名寿信院釈願徳居士)」、前掲書『偲んで』二二二頁。
- 86 「弔辞」、前掲書『偲んで』三三三～三四四頁。
- 87 本間徳雄「朝鮮の土木工事について」、前掲書『朝鮮の国土事業』五八～五九頁。

88 同右、七五～七六頁。

89 同右、六〇頁。

90 本間徳雄「満洲工業の姿」、前掲書『あ、満州―国つくり産業開発者の手記』二五〇～二五一頁。

91 前掲論文本間徳雄「豊満ダム」、前掲書『あ、満州―国つくり産業開発者の手記』一九三～一九五頁。

92 「巻頭言」『カナオ会』一〇号（一九七三年七月）、本間義雄「徳雄大伯父（法名寿信院釈顯徳居士）」、前掲書『偲んで』二二四頁。